

1919（大正8）年9月19日生まれの加藤は、関東大震災のときには4歳の誕生日直前だった。渋谷金王町の家で罹災（りさい）した。しかし、加藤には罹災の記憶はほとんどない。わずかに母織子の背中に負われて逃げた記憶だけがかすかに残っているだけである。幼少時の5歳の差は大きく、丸山の場合とは大きく異なっている。

しかも、関東大震災のことについて、文筆業になっても、ほとんど何も書いていない。自伝的小説『羊の歌』にも述べられていない。はっきりと分からないことについては述べない、という加藤の姿勢が貫かれたのだろうか。

それでも加藤の自己形成にとって、大震災後の都市化が進み、都市文化が花開き、「でも暗し」といわれることがあっても「大正デモクラシー」の多少なりとも自由な雰囲気の中かで物心がついたということは、加藤の自己形成に大きな意味をもったに違いない。